

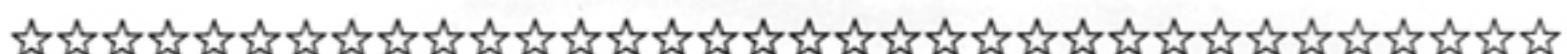
## ねじりはちまき

9月 長月 白露 秋分の月になりました。  
9月1日防災の日と210日がいっしょです。8日が白露です。  
17日敬老の日。23日秋分の日となっています。

17日の敬老の日は、人生の先輩として長年にわたり社会や家庭の為に働いて来た老人を敬い、長寿を祝うという日です。  
昭和26年に9月15日をとしよりの日と定められ、昭和41年に「敬老の日」と改名されて、国民の祝日になりました。  
現在は、9月の第3月曜日を敬老の日としていますが、9月15日を「老人の日」の名称で記念日として残されています。  
また9月15日から21日までを「老人週間」と定め、老人福祉の关心と理解を高めるための、様々な行事が開催されているようですね。

今年の夏は本当に暑かったですね。その疲れが出る頃です。  
どうぞお大事を祈ります。

幸田 常一



こちら事務所です！

郡山市の現場を引き続きお世話になっております。  
また先月から本宮市の現場で、住宅新築工事を開始させて  
いただいております。そしてもう1件、本宮市の現場で新築  
工事をお世話になっています。

## <会社近況>

9月に入りました。

暑さも一段落し、ようやくしのぎやすくなってきました。

夏の疲れが出るころかと思います。どうぞお体大切にお過ごし下さい。

現在は、本宮市の現場で住宅新築工事をお世話になっております。

開始させていただいたばかりなので、基礎工事の段階です。

これから涼しくなり、作業もしやすくなっていますので大変助かります。

また本宮市の別の現場ですが、10月末頃完成予定の現場があります。完成しましたら、お引渡し前に完成内覧会をさせていただくことになりました。詳細は後日お便りでご案内させていただきたいと思いますので、よろしくお願ひいたします。

## おいしい♥9月

### 「サンマ」

スーパーの鮮魚コーナーに、サンマがずらりと並ぶようになりましたね。

サンマには、沢山の栄養が含まれています。良質のタンパク質の他にも、鉄分やカルシウムと、その吸収を助けるビタミンDも多く含まれています。サンマの蒲焼、サンマご飯、梅煮などサンマ料理も色々ありますが、焼きたてのジュワーと音をたてているところにスダチを絞って、大根おろしていただくのが私は好きです。

皆さんもサンマで小さな秋の訪れを感じてみてはいかがでしょう？

(^ )<<・・・・・(^ )<<・・・・・(^ )<<・・・・・(^ )<<・・

平成30年9月5日発行

有限会社 幸田建設

<発行責任者>幸田久美

〒969-1204

本宮市糠沢字八幡1番地1

電話0243-44-3816

<後記>

毎年恒例のバーベキュー大会をしました。暑い日でしたので、冷え冷えのビールやお茶はとてもおいしかった。シメの焼きうどんは務くんが作ってくれたのですが、手際もいいし料理上手なのでとてもおいしかったです。(事務員k)

## 温泉の話

日本には温泉が多く、日本人は温泉好きである。今回は温泉の話題を取り上げてみたい。温泉の定義じみた話だが、一般的に温泉とは地中から湧き出る熱水泉を利用する入浴施設を指すが、地中のマグマを熱源とする火山性温泉と、火山とは無関係の非火山性温泉がある。また、温泉水に含まれる成分により、様々な色や匂い、効能がある。実は、温泉法には温泉水の温度は25度以上という定めがある一方、25度未満でも規定物質を一種以上含んでいれば温泉といえるとされている。ちょっと分かりにくい。アメリカやドイツでは20度以上のものが温泉とされている。それと、主に阿武隈山系に鉱泉と言われるものがあるが、鉱泉は一定の成分を含んだ地中からの湧水ことで、沸かす必要があるものの、温泉法の定義からいふと温泉と余り変わりがないようだ。鉱泉に入浴したことがありますか。

日本列島は火山列島である。従って、温泉も多いというイメージである。数字的にどうか、温泉のデータを見てみよう。先ず全国のデータは、温泉地（宿泊施設1軒でもあれば）の数が3,084、泉源の数が27,701（そのうち自噴が30%、泉温42度以上が50%）、温泉施設数が20,972となっている。その中で福島県はどういう位置を占めているか。温泉地の数が132で全国5位、泉源の数が781（利用が440・未利用が341）で全国8位、温泉施設数が764（公衆浴場を含む）で全国8位となっている。このように最新のデータで、いずれも全国ベスト10に入っている。福島県は全国的に見ても、温泉資源に恵まれているといえる。小生も認識を新たにしたところである。

ところで、温泉は含まれている化学成分や温度、液性（PH）、色、匂い、肌触りなど様々な特徴があるのはご存知のとおりである。これを泉質といっているが、法律上は温泉に含まれている化学成分の種類とその含有量によって決められている。例えば、単純温泉は温泉水1kg中の溶存物質量が1,000g未満で、湧出時の泉温が25度以上のものをいう。そのうちPH8.5以上のものを「アルカリ性単純温泉」という。効能としては、自律神経不安定症、不眠症、うつ状態に効能があるといふ。泉質は10種類に分類されていて、単純温泉以外に、塩化物泉、炭酸水素泉、硫酸泉、二酸化炭素泉、含鉄泉、酸性泉、含ヨウ素泉、硫黄泉、放射能泉がある。この中で含鉄泉や硫黄泉は見た目にも分かりやすい。放射能泉は意外に思われるかも知れないが、ラドンが一定量含まれているもので、放射線量がレントゲン線量よりも少なく、効能があるということ。兵庫県の有馬温泉が該当する。

次に温泉のメカニズムだが、温泉水は雨水などが地下に浸透し、ゆっくりと地下深く循環して熱や成分を獲得したもので、これは数年から数万年かかるとされている。温泉が自然に湧出する場合は、温泉水が地上にまで上がってくるための通り道が必要であり、多くの場合地下深くから地上までつながっている断層や破碎帯が温泉水の通り道となっているということである。それにしても開湯して数百年という話を聞くと、よくも温泉水は枯れずに長持ちするものだなと思う。かなり地下深く循環している故かも知れない。余談だが、一般的に地下深くなれば温度が高くなる。地中を掘削すれば水温は100m毎に2~3度上昇すること、であれば地表温度15度のところを1000mも掘削し、地下水に当たれば温泉誕生ということになる。その可能性は大である。そういえば、かなり前のことだが「ふるさと創生交付金1億円」が各市町村に交付された時、一番多かった事業が「わが町・村に温泉を」と温泉掘削事業であったという。県内でも結構多かったはずである。さて次は温泉の歴史はどのくらい分かるのか辿ってみよう。気が遠くなる話だが、温泉研究者によると別府の温泉はおよそ5万年前には湧いていたという。では、日本人が温泉を利用するようになったのはいつ頃か。どうも石器時代らしい。石器時代の遺跡から温泉を利用した遺跡が見つかっているというのだ。文献資料に記録が見られるのは奈良時代で、古事記や日本書紀、出雲風土記にはヤマトタケルノミコトが東方遠征の帰りに草津に立ち寄って温泉で傷を癒したことや持統天皇の時代に飲泉によって病者を治療した記述されてい

る。そういう意味では、温泉は病気やケガを癒す不思議なものとして崇められ、信仰の対象になっていたのかも知れない。日本最古の温泉は有馬温泉（兵庫県）とされる。631年には舒明天皇が約3ヶ月滞在したという記述が日本書紀に残っている。余談だが、有馬温泉は豊臣秀吉にも愛されたという。古いと言えば、有馬温泉の外に道後温泉と別府温泉が挙げられ、三古湯ということ。いずれもそれなりに古さを誇る伝承があるようだ。また、温泉の入浴や湯治を指して、これを日本の文化であるという人もある、どういう意味か。日本は温泉大国で、日本人は温泉をこよなく愛しており、ライフスタイルとして欠かせないものになっているということか。何かにつけて温泉に行こうとなる。旅行すれば温泉泊まりになる。忘年会となると温泉でとなる。忙しい農作業が一段落すると温泉で骨休みとなる。同窓会も温泉だ。家族でお祝い事をやるとなるとこれまた温泉だ。これ以外にもまだあるだろう。そして温泉は芸の文化や食の文化にも大いに寄与してきている。温泉は人々に何とも言えない安らぎを与え、明日への英気を養ってくれる不思議な力がある。皆さんはいかが思われますか。以上はどちらかというと温泉の入浴の方に関するが、もう一つ湯治の方はいかがだろうか。昔は農家の人が農閑期に湯治に行くことがあったという。自炊できる安価な湯宿で長期間逗留（一週間以上）して骨休みをするのだ。それより一步踏み込んで温泉療法で特定の疾患を癒そうとする場合もあるだろう。それが医学的にみてどの程度治療に役立つか分からぬが。秋田県の玉川温泉の例を見てみたい。

「玉川温泉の湯治の手引き」にはこう書いてある。玉川温泉はPH1.2と強酸性泉である。効能には浴治と飲泉による効能があり、浴治では「リュウマチを含む神経系統の疾患」についての効能を挙げるとこう書いてある。「入浴初期（3~7日目）には、副腎皮質機能の低下により一時的な症状の悪化がみられるが、次第に温泉浴の効果が現れ、副腎皮質機能の亢進による症状改善の治癒が認められる。副腎皮質機能の亢進がステロイドホルモンの分泌を高め、自力治癒の促進につながるといわれる」そのほかについてもいろいろ書いてある。疾患の中には45日以上逗留することが求められる温泉療法があるようだ。インターネットを検索していたら、温泉療法に代替医療として積極的位置を与えていたり医療関係者もいるようだ。余談だが、そもそも西洋では温泉に入浴するという発想はないようだ。それと、温泉宿の浴室にはよくサウナがあるが、サウナはフィンランドが発祥の蒸し風呂、同国では各家庭にあるそうだ。サウナ浴が医学的に効能のあることは間違いないが、ではなぜ温泉浴室にサウナも付いているのか。よく分からぬ。ご存知の方はいますか。

ところで、温泉が好きなのは人間ばかりではない。長野県の地獄谷野猿公苑はニホンザルの生態がよく観察できる公苑として有名だが、この公苑に湧水する温泉にサル達が入浴するのを見られるところである。テレビで見たことがあるが、まこと人間と同じに入浴を楽しんでおり、ご満悦の様子が印象深い。ここ以外に、北海道函館市の熱帯植物園でも、期間限定だがニホンザルの温泉入浴が見られるということだ。いずれも人気スポットだ。それと動物の温泉療法がなされているところがある。ご承知の方もいると思うが、いわき市の湯本温泉の泉湯を使い、怪我で故障した競走馬のリハビリを行っているのである。それにしても温泉でも露天風呂はいい。そもそもはすべて露天風呂だった。そこは直に自然が感じられて体も心も伸びやかになる。頭の中が空っぽになってしまうのがいい。今回はこれで終わりとする。

## 埋蔵金伝説 歴史とロマンの山・鍬崎山

### 【今回登った山の概要】

8/5~6

鍬崎山（くわさきやま、2090m、日本三百名山、富山県）

7/25~28に山のベテラン・山岳写真家Kさんと奥大日岳と剣岳に登って、最終日、標高2400mの室堂平から立山・黒部アルペンルートをバスで美女平に下るとき、カーブする度に東南側に優美な山が見えた。以前から資料を集めていたが実際はどれが鍬崎山かは分からなかった。Kさんに教えて貰い、納得した。

この山は埋蔵金伝説のある山で、戦国時代の富山藩主・佐々成政（さっさなりまさ）が、1585年、天正13年豊臣秀吉が富山城を攻めてくる直前に鍬崎山に黄金を埋めたと言う伝説があるとのこと。

8月5日（日）10:30本宮の自宅発、今回は単独行。10日前と同じく磐越道・北陸道を経由し立山ICを15時に降りる。天気が良くコンビニで缶ビールとパンなどを買う。駐車場からは前回登った剣・立山連峰が良く見渡せる。左手から奥大日岳の連山、その右側に剣岳と立山連峰が連なって見えている。さらに右手に少し離れて今回登ろうとしている鍬崎山が槍ヶ岳よりは緩やかで優美な三角形の山頂を見せている。

登山口には富山地鉄立山駅手前の立山山麓スキー場のリフトを利用して行くことになる。スキー場の駐車場は広く冬期間はスキーパークで混み合うのだろうと思う。この山は時間を要する山で下から歩くと時間的には厳しく登りか下りのどちらかにヘッドランプを使うことになる。初めての山なのでリフトを使う。ガイドブックには通年動いているとされていたゴンドラリフトは今年の3月で廃止されたが普通のリフトは営業していた。

大きな建物の2階の窓口でチケットを購入する。始発は6時。

車はだだっ広い駐車場に5台しか駐まっていない。5時近くになっても日陰のないコンクリートの駐車場は暑くて、夕食の準備をする気にならない。再度よく見ると駐車場の外れに小さな建物と樹木が数本立っているところがあったので移動し、少しだけの日陰で準備を始める。その建物は「ガスボンベの保管庫」で火気厳禁の赤いプレートが張ってあった。

管理棟からは見えないように（実際は頭隠して尻隠さずだが、少しは遠慮するポーズをとる）車の陰で蚊取り線香を焚き持参のコンロでお湯を沸かしカップ味噌汁を作る。缶詰も開ける。ご飯は通常夜は食べないのだが山に登る前日は食べている。妻が朝作ってくれたおにぎりはクーラーボックスで冷やしてき

たもの。ビールと焼酎で好天祈願。

退社する従業員の人にも特に何も言われなかった。火気厳禁とは建物内のことなのだろう（？）。

助手席の車の窓に網を張り運転席後ろの席に蚊取り線香をぶら下げ、20時前には助手席の特別仕様のベッドで就寝する。

8月6日（月）4：30起床。天気が良い。朝食は缶詰、サトーのご飯とカレーをしっかりと食べる。行動中もお菓子やナッツ類を食べたり帰りの車の中で数時間の間に眠気覚ましに食べるので自分は山から下りたときに体重が減るということはあまりない。かえって増えたりすることがある。

5時頃登山者二人の車が1台やってきて準備している。

6時前リフト乗り場で動き出すのを待つ。人員配置が終わり動き出す。スキ一客用フード付き横一列4人乗りのリフトに自分だけ、一番乗り、後続は誰もいない。上空は快晴だが低いところには雲がある。リフトを1回乗り継いで歩き出す。係員の人が最終便は16：15ですよと念を押される。閉鎖されたゴンドラ山頂駅（標高1188m）までの分約10分が余計にかかる。

トレッキングコースとして整備された遊歩道は緩やかな登りで所々にベンチが置かれている。うっそうとしたブナ林は雰囲気があり林の奥に黄金が埋蔵されているのではないかという想像がかき立てられる。

7時過ぎに着いた瀬戸蔵山（せとくらやま、1320m）のベンチで一休みしていると、今朝5時頃駐車場に着いて私より後にスタートした二人のうちの一人の人が登って来て話をする。もう一人の人は鍔崎山までは登らずにゆっくり歩いて大品山（おおしなやま、1420m）で引き返すこと。少し下って丸太の階段を上り、眺望のないほぼ直登の登りを延々と登る。ブナ林の尾根を登り切ると見晴らしのきく大品山山頂広場に着く。雲が増えてきて見通しが悪くなってきた、8時半。ここが遊歩道の終わり。これから先が長い。

樹林帯の中を大きく下り、大品山までと同じく眺望のないほぼ直登の登りを延々と登る。1時間半近く登ると小さなピークが見えてきた。岩に取り付けられた鎖場をよじ登ると小広い平場になっていて、前方に里山みたいな穏やかな三角形の鍔崎山の山頂がえた。

ここからは一端下って登りに転じ、流れる霧によって50m先くらいの樹林が見えなくなるときがある。細い尾根上の道を上っていると、瀬戸蔵山で追い抜いていった自分よりも若い人が下ってきた。山頂の上空は雲で、見通しがきくまで30分以上も待っていたが雲が取れないので下山してきたとのこと。

互いの山行の無事を声がけして別れる。少し登ると山頂だった。10時50分。約5時間の道のりだった。

山頂そのものには雲はかかるなく寒くはないが上空は流れる雲で青空はなく、南正面に眺望を期待した薬師岳の勇姿は見えない。一時的に雲が薄くなり北東側の立山方面の山並みうっすらと見えた。眼下にはダム湖の有峰湖（ありみねこ）が見えた。

パンやバナナを食べながら雲が晴れるのを待ったが変らない。下りのリフトの時間が気になるので、11：40 下山にかかる。

同じ道を3時間半かかって大品山、瀬戸蔵山を経て、樹林帯を抜けてリフト乗り場のある遊歩道に出ると霧が濃くなってきた。カッパを着るほどでなく、霧の中、ほてった体には気持ちが良い、もう少しシャワーくらいに降って欲しいなどと思ってしまう。

霧の中、ヘルメットを被った子供達20人くらいが保護者の見守る中でジップライン（傾斜のあるワイヤーに下がったロープにまたがり下り降りる。長さは90mから150mを超えるものまで6本のラインがある）で遊んでいた。

さらに濃くなった霧の中2本のリフトを乗り継ぎ、16時無事管理棟に着く。山行時間10時間。

山頂までは樹林帯の中の地味な歩き、山頂からの眺望は霧・雲に遮られて限られた展望の山行だった。

前回の好天の下、花と眺望に恵まれた奥大日岳・剣岳のような山行もあれば今回のような地味な山行もある。雨に遭わなかつたことを良しとするしかない。

管理棟のレストランは店じまいを始めていたが、熟年のお姉さんに頼んで抹茶のソフトクリームを食べる。自分へのご褒美だ。

前回の山行の帰りに寄った立山町の吉峰温泉で汗を流し、往路と同じルート北陸道、磐越道で帰宅する。23時着。

平成30年9月 NO71 アンチエイジング 山旅遊人